Ono M., Ohba H. and Nishida M. 2000. *Adenocaulon himalaicum*. Newly Revised Makino's New Illustrated Flora of Japan. p. 792. Hokuryukan Co. Ltd., Tokyo (in Japanese).
Umezawa S. 1997. Flora of the Islands of Rishiri and Rebun, Hokkaido. Hokkaido-Shinbunsha, Sapporo (in Japanese).
Vorobiev D. P., Woroschilov V. N., Gurzenkov N. N., Doronina J. A., Egorova E. M., Neczaeva T. I., Probatova N. S., Tolmatchev A. I. and Czernjaeva A. M. 1974. Key for the Vascular Plants of Sakhalin and Kurile Islands. Nauka, Leningrad (in Russian).

([a]Graduate School of Agriculture,
Hokkaido University,
[b]Sakhalin Botanical Garden,
Yuzhno-Sakhalinsk,
[c]The Hokkaido University Museum)

新　刊

□星野卓二，正木智美，西本眞理子（画）：**岡山県スゲ科植物図譜** 229 pp. 2002. ¥5,714. 山陽新聞社.

見開きの左頁に種の説明，同定のカギ，ノート，分布図，右頁に線画という配置である．県内産95種類を扱い，巻頭に検索表がついている．スゲの仲間は見分けがむづかしく，分布が広いので，岡山県に限らず利用できるだろう．分布図は郡市界入りで，GRASS という公開ソフトで作図されたそうだ．かつて地図の下図作りに汲々としていた私などは，時代が変わったことを感じさせる．ただ，この分布図に限ったことではないのだが，自分の県の境界だけが描かれていると，よそ者にはどうもピンとこない．他県との境界の分岐をちょっと描いておいてくれると，地理的イメージがずっと豊かになると思うのだが，どんなものだろう．（金井弘夫）

□レッドデータブック近畿研究会（編著）：**改訂・近畿地方の保護上重要な植物** 164 pp. ¥3,000＋送料. 2001. 平岡環境科学研究所.

レッドデータブック近畿2001と副題があり，1995年に刊行されたものの改訂版である．総論，近畿地方の植物，保護上重要な植物のカテゴリーと選定経過，保護上重要な植物の生育環境，各府県の現状と保護上重要な地域，保全への課題，と４章で100頁を占め，以降は文献および種々に仕分けされた対象植物の目録と付表類である．付表では，過去の記録と綿密に対比して，今回の報告にどのように反映させたかが，わかるようになっている．生育環境の章では，15種類に区分した環境条件それぞれについて，要領を得た記述と保全対策や問題点が述べられている．保全への課題の章は，いわゆる「保護・保全」の流行語の横行や，予算目当ての場当たり的対策に対して，長期的視野に立った観点からの意見提示がなされ，うなづかされることが多い．地域版レッドデータブックの制作は全国的な流れだが，そのまとめに当たっては是非とも本書を参考にしてもらいたいと思う．平岡環境科学研究所の連絡先は，220–0102 神奈川県津久井郡城山町原宿 5–15–6（Tel. 042–783–5881，Fax. –5882）.（金井弘夫）

□長野県自然保護研究所：**長野県版レッドデータブック維管束植物編** 297 pp. 2002. 同研究所.

1997年に長野県植物誌が刊行され，そのデータベースからレッドデータ対象植物を抽出し，これを基にして再調査や検討がおこなわれた．こういう基礎資料があったおかげで，同時に発足した他分野に先駆けて刊行のはこびとなった．本書の主体は200頁におよぶ危惧種の解説で，絶滅種から準絶滅危惧種まで790種類が１頁４種類ずつ，特徴や産地の状況などの簡潔な記述を伴って示されている．すべての種類に産地を示す地図がついているが，市町村単位の表示で，現況は知らせたいが詳細は伏せたいとの配慮がうかがえる．出現量の目安として，分布メッシュ数が示されているが，そのメッシュは「約５km 四方」と，少々頼りない表現になっているのはもったいない．これは「標準地域メッシュの５倍地域メッシュ」と表現すべきだった．長野県はそういうメッシュシステムによる植物誌調査を，最初にスタートさせた県なのである．わが国で最もフ

ロラの変化に富んでいる長野県で本書が刊行されたことは，現在進行中の他地域の活動のはげみになるだろう．入手については上記研究所，381–0075 長野市北郷 2054–120 Tel. 026–239–1031へ問い合わせられたい．

（金井弘夫）

□McManus M. T. and Veit B. E. (eds.): **Meristematic Tissues in Plant Growth and Development** 301 pp. 2002. Scheffield Academic Press. £89.

植物の分裂組織についての最近の成果を展望したもので，次の9章が分担者18名によって記されている．各章の見出しは次の通り．1. 分裂組織の形成と機能，2. 栄養器官における分裂組織，3. 高等植物胚発生における頂端分裂組織の形成，4. 生殖器官における分裂組織の遺伝的制御，5. 腋性分裂組織の形成，6. 高等植物の葉序，7. 葉形形成と分裂組織，8. 植物細胞分裂の制御，9. 根の分裂組織．

分類学をやる者にとって，植物の形は最も大事な認識対象だが，それがどのように作られてゆくのか，そこにどんな法則性があるのか，出来上がった植物体を見るだけではどうもよくわからない．同じ種の葉形でも，比較的一定のものもあれば，とんでもなく変異していて，別な種類と見誤るようなものもある．そういう現象の法則性を把握するために，形態学というものは基本的だと思うのだが，少なくとも日本ではこの分野の研究には日が当たりにくい．本書では総計約1000件の文献（その中で日本人の報文は重複を含むが約75件）が挙げられている．多くはいわゆる生理・生化学な観点からの形態形成の問題を扱うもので，我々が目にする「形」との接点はまだ遠い感じがするが，本書によってこの研究分野の世界的な情勢を一望することができるのは，歓迎される．

（金井弘夫）

□大場秀章：**花の男シーボルト** 198 pp. 2001. ¥690. 文芸春秋社.

日本植物研究におけるシーボルトの業績については，すでに語り尽くされているように思われるが，著者は更に別の方向から光を当ててみせる．まずドイツ人であるシーボルトが，オランダ人として日本にやってきたことについて，当時の植民地争奪戦を背景とする欧州情勢，これにからめたシーボルトの生い立ちと性格の描写が，多くの資料を引用しながら，オランダが特別の思い入れの下に，彼に単なる医師としてではなく，日本についての特定研究とも言える任務を与えて派遣したことが語られる．シーボルトの日本における活動はその任務に応えるためのもので，オランダ商館が作り上げた人脈を活用して，ツュンベリーやケンペルにまさる広範な成果を収めたことが，あらためて強調されている．そしてこれ迄あまり認識されていない貢献として，日本産生植物の導入によって欧州の園芸界に大きな変革をもたらし，現在の隆盛に導く一つのきっかけを作ったことが述べられている．シーボルトの没後，その将来品はイギリス，オランダ，ロシアなどに分散されたが，最近それらの再評価にかかわった著者が，あらためてシーボルトの別な見方を提示したものである．大学博物館の職にあり，また音楽の素養のある著者が，いわゆる「枚挙生物学」に対する周囲の無理解をチクリとやったり，彼の作曲の腕前を評したりしているのも，見逃さない方がよい．

（金井弘夫）

□大場秀章：**道端植物園** 240 pp. 2002. ¥760. 平凡社.

いわゆる路傍雑草についての随筆集である．こういう本はいくらもある．簡単な記相にはじまって近似植物の見分け方，名前の由来，古典の引用，民俗的利用…と，書いてある項目だけならべれば月並みメニューなのだが，読み進めて行くと類書とはなんだか違っているという気がしてくる．古い文献をよくこなしていることと，帰化植物が多いので外国の文献にも目を配っているのが，その理由だろう．これに加えて著者自身の経験や最近の研究成果もあちこちに取り込まれている．植物観察会の指導者に，新しい台本が提供されたと言ってよかろう．

（金井弘夫）